
二枚の切り札 ~ Two pieces of aces ~

BlackRX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二枚の切り札 ｝Two pieces of aces｝

【Nコード】

N0649I

【作者名】

BlackRX

【あらすじ】

『炎』の切り札は闇を焼き払い、『光』の切り札は闇を打ち消す。世界初の民間警察組織、通称PPOの一つ『サジタリ阿斯・コーポレーション』に所属するエージェント、坂本羽矢人と辻内堯誠の元に、ストーカー被害に悩まされる人気アイドル声優、井川桜子の警護依頼が入ってくる。単なるストーカー退治だと気楽に構える羽矢人に対して、この依頼は単純には終わらないと感じる堯誠。運悪く、堯誠の予感的中し彼等二人は、死闘の中に放り込まれることになる……。

第1章 依頼（1）（前書き）

この作品は、一言で言うところ『格闘アクション』です。

作者としましては、一応『香港やハリウッドのアクション映画（カンフーアクション＋銃撃戦）』

のような物語を書いていこうと考えています。

拙い文章の上に理屈っぽい所が多い作品ではありますが、上記の物が好きな方などに読んで頂けると幸いです。

ご意見・ご感想などありましたら、遠慮無くどんどんお願い致します。

第1章 依頼（1）

第1章 依頼

1.

- 8月14日 16時30分

「うわっちょちょよっ、ちょっと待った！！タンマタンマ！！」
さかもとはやと
坂本羽矢人は、大慌てでゲームコントローラーを動かした。

しかし、時遅し。

ゲーム画面には大きく、『K・O』という文字が映し出された。

「また負けたーっ！」

羽矢人は、コントローラーを放り投げた。

「なんだ。また負けたのか」

羽矢人の近くで漫画雑誌を読んでいた辻内堯誠^{つじうちたかのぶ}は、雑誌から顔を上げて羽矢人に聞いた。

「また負けた！！」

「ダッセ」

「なんやと！コラ！」

からかうように言った堯誠の言葉に、羽矢人の目が三角になった。

「お前また超必殺技、出し惜しみしただろ」

「出し惜しみなんかしてへんて。ただ、最後にドカーンと格好良く
決めよう」と。

「だから、それが駄目なんだよ。

相手はボスなんだから、ゲージ溜まったらすぐに超必殺技を連続
技に組み込んで攻めない」と。

と、堯誠は雑誌を閉じて言った。

「そんな、いきなり使ったらもったいないやないか！

ええか？ああいうモンはな、最後に華々しく決めてこそ、その価

値が・・・」

「さつきから、それで負けてんだろ」

「それを言ったら、身も蓋もないやろ」

堯誠の冷静な指摘に羽矢人は口を尖らせながら、放り投げたコントローラーを拾い上げた。

ゲームは既に、タイトル画面に戻っている。

「よし！リターンマッチや！」

と羽矢人は気合いを入れながら、コントローラーのスタートボタンを押す。

「リターンマッチや！って、もう10回越えてんじゃない。再挑戦始めて。」

ていうか、いつも最初からやり直さないで、ボス戦の所でコンテニューすりゃいいのに」

「うるさいのう。外野は黙っとれ。」

俺はな、お前みたいにクリアできればそれで満足っちゅう、つまらんプレイはせんのか。

もっと内容のある、クリアするにもこうビシッと決まる・・・

いわゆる『魅せるプレイ』を追求しとんのか！」

「いや・・・魅せるプレイは分かるけど、難易度設定が最低の状態で負け続けている状況をもっと・・・」

「シャラップ！！」

画面を見たまま堯誠の言葉を制するように言うと、キャラクターを選択してゲームをスタートさせた。

ちなみに使用するキャラクターも、さつきからずっと変わっていない。

「・・・そんなに『魅せるプレイ』がしたいなら、改造コードでも使えよ」

「拒否！・・・っと、ヤバイ！食らった！！くっそ！やりおつたな！！！倍返しじゃ！！！」

と、堯誠が言った言葉を一蹴すると、羽矢人はせわしなくコントロ

ーラーを動かし始めた。

「やれ やれ」

と堯誠は呟くと、さつき途中まで読んでいた漫画雑誌を取り、まだ読んでいないページを開いた。

坂本羽矢人 現在29歳

辻内 堯誠 現在28歳

年齢・学年が、共に同じの『同級生』だ。

出会ってからもう、かれこれ8年の付き合いになる。

二人が初めて顔を合わせたのは現在の職業に就く前、別の職に就いていた時だ。

偶然にも同業者であり、年も同じだったため意気投合。親友となった。

その後、紆余曲折あつて二人共その時生業にしていた職業を辞める事になり、

二人そろつて現在の職業へ転職した。

ちなみに今の職業では、二人はコンビを組んで仕事をしている。

結局、羽矢人はその後5回ほど『リターンマッチ』を行つて、ようやく念願のオールクリアを達成した。

「よっしゃーっ!!!見たかポケエー!!!」

エンディングが流れる画面の前で、大きくガッツポーズを作る。

そして、堯誠の方を振り返り、

「見たか！俺の信念を！」

と、どうだと言わんばかりの顔をした。
が、

「あれ？」

そこに堯誠の姿は無かった。

「あいつ、何処いきおった!？」

と言いながら、辺りを見回していると

「あん、呼んだか？」

と、堯誠が居間に入ってきた。

「呼んだか？じゃないて！クリアクリア！ワンプレイクリアしたで！見てみい！」

「おー！とうとうクリアしたか」

「やっぱり、最後はああいう風に魅せるキメ方をせんな！」

「そりゃあ良かった」

そう言いながら、堯誠はキッチンに向かうと冷蔵庫を開けて、アクエリアスのペットボトルを取り出した。

そして、食器入れからグラスを取りながら

「ハヤト、アクエリ飲むか？」

と、羽矢人に聞いた。

床に寝っ転がって、クリアの余韻に浸っていた羽矢人は

「ん？おお、頼むわ」

と堯誠に答えると、

「いやゝ・・・余は満足じゃ！」

と言って大きく伸びをした。

が、すぐに「あ、そうや！」

と、何かを思い出したように呟くと首を上げて堯誠に言った。

「おい、タカ！俺のジュースは・・・」

「分かってるよ。氷入れんだろ？」

「ご名答。よろしゅう頼むで！」

「注文が多い野郎だ」

堯誠は小さくかぶりを振りながら呟くと、グラスに氷を放り込む。

ちなみに『ハヤト』というのは、今の職場で付けられている羽矢人の愛称であり、

『タカ』は堯誠の愛称である。（非常に単純だが）

「ほいよ」

堯誠は、氷を浮かべたアクエリアスのグラスを羽矢人に渡した。

「あい、ども、おおきに」

と羽矢人は体を起こしてグラスを受け取ると、それを一気飲みし大きく息をついた。

「カアーツ！ 苦しい戦いに勝利した後の、アクエリアスは格別や！」

「ハヤト、まだ足りないなら冷蔵庫にボトル入ってっから」

堯誠はカーペットの上に腰を下ろすと、アクエリアスを一口飲んで言った。

「いや、取り敢えず一杯でええよ。この部屋クーラー効いとるし」

と、羽矢人はグラスを近くの座卓に置くと、背中を少し倒して左手を床につき体を支えようと、

ポケットから携帯電話を取り出す。

「ところで、今何時や・・・？」

ディスプレイを覗き込むと、『17:40』と表示されていた。

「・・・なんや、もうこんな時間かいな？ はつやいなあ」

少し驚いた声を上げ、近くにあったリモコンを取りテレビをつけた。見慣れた女性アナウンサーの顔が、目に飛び込んでくる。

「お。ウスイさんや・・・」

一人ブツブツ言いながら、リモコンを傍らに置く。

「ハヤト、8に替えてくれ」

と堯誠が言った。

「8？ なんで？」

「いや、この時間は8見てる事が多いから」

「あ、そう。別にええで。お前の家のテレビやしな」

羽矢人がそう言って、チャンネルを替えた時――。

座卓に置いてあった、堯誠の携帯電話が鳴り出した。

「誰だろ？」

と、堯誠が携帯電話に手を伸ばす。

「タムちゃんやな」

羽矢人が、テレビから目を離さず言った。

「んなバカな………ってホンマや!!」

羽矢人の言葉を鼻で笑って電話を見た堯誠は、思わず叫んだ。

羽矢人の言葉が的中していたからだ。

「!!」

羽矢人はテレビに集中したまま、右手の指を勢いよく鳴らした。

何かあると指を鳴らすのは、羽矢人の癖だ。

ちなみに堯誠の方には、何かあると人差し指を立てる癖がある

「ビンゴや。さっすが俺やな………っていうか、お前東京人やろ」

羽矢人のツッコミには耳を貸さず、堯誠は電話に応答した。

「はい、辻内です………」

第1章 依頼（2）

2.

- 7月25日 1時10分

大昔、人は外が暗くなると同時に床に入っていた。

現代のように周りが娯楽で溢れているわけではないし、ろくな灯りもない時代で夜になれば

浅い時間でも周囲は真っ暗になってしまうので、確かに寝る事ぐらいしかできなかっただろう。

でも

自分は、それだけ理由ではなかったような気がする。

大昔の人々が、夜になると同時に寢床に入ったのは・・・。

夜の闇が、怖かったからではないのだろうか？

真っ暗になって、何も見えなくなる闇が。

いや、

おそらくそうだったのだろう。

少なくとも、自分は、そう、思う。

少なくとも自分は、夜が怖い。

夜の闇が怖い。

周りが暗くなり、何も見えなくなってしまう。

灯りを点けても、明るくなるのはごくわずかな範囲だけ。

灯りの届かない所は何も見えない。

だから、何かが潜んでいても自分は気がつかないのだ。

その何かが、密かに忍び寄ってきて牙をむいたとしても。

「遅くなっちゃったな・・・」

「いがわさく」

井川桜子はマンションのエレベータの中で、携帯電話のディスプレイを見ながらため息をついた。時間はもう、深夜の一時を回っている。

「何か最近、遅くなること多いなあ……。今日だけで雑誌のインタビューを二つと、

新曲のジャケット撮影に……。あとIn4のグラビア撮影か……

」

In4とは、アイドル声優専門の雑誌の名前だ。

アイドル声優のグラビアが多数掲載されており、桜子もこれまで何度か載っている。

はあ、とため息をついてエレベータの壁により掛かった。

桜子の部屋はマンションの最上階にあるので、到達するのに少し時間がかかる。

「お仕事は好きだし、イヤにはならないけど……

一気にこれだけ来るとちょっとつらいかな……。」

ややボーッと天井を見つめながら、誰ともなしにつぶやいた。

「明日も結構早いからなあ……。帰ったらお風呂入ってすぐに寝よ……」

」

程なく、停止階を知らせる音が鳴り、エレベータが停止した。

「あ、着いた」

わずかな沈黙の後、ドアがゆっくりと開いた。

手に持っていた携帯電話をバックにしまい、エレベータから出る。時間が時間だけに、廊下はしんと静まりかえっている。

一応、都心部に建っているマンションなのに、それを感じさせないほどに物音がしない。

明かりは点いているのだが、それでも何か不気味だ。

いや、むしろ明かりが点いているだけ、よけいに不気味に見えると
言うべきか。

最近、こういった時間に帰ってくる事も多くなったので、
このような光景を見る事も結構あるが、何回経験しても慣れない。

桜子は少々、薄ら寒いものをかんじつつ自分の部屋の前へと急い
だ。

日本の夏場特有の、湿気を含んだ蒸し暑さがべったりとくつつくよ
うに襲ってくる。

このじめじめした暑さは、本当に好きじゃない。
背中に感じる薄ら寒さと、首筋のあたりを中心に感じる
嫌な蒸し暑さが混ざって不快さが一層増した。
しかし、部屋はすぐそこだ。

- 帰ったら、すぐにクーラー入れてお風呂に入る。

自分の部屋の前で、バックから鍵を取り出し鍵を開けると扉を小
さく開けて中に入った。

蚊が入ってこないように、すぐに扉を締めてロックをかけた。

「ただいま……って誰もいないけど」

玄関の明かりをつけながら、桜子は一人で言っ一人で突っ込んだ。
彼女は一人暮らしなので、誰も待っているわけではないのだがいつも
言ってしまう。

これは、桜子の昔からの癖だ。

だが、一人暮らしをするようになってからは、ドアを開けた時の静
寂が怖いので

わざと言ってる部分もある。

とはいえ、「ただいま」と言っ本当に返事が返ってきたら、それ

はそれで怖い事だが。

だがここは幸いにも（？）誰からも、返事は返ってこなかった。
桜子は靴を脱ぐと、玄関の灯りを点けたままりビングに入って今度はリビングの灯りを点けた。

そのままの流れで冷房のスイッチを入れ、続けてリモコンに手を伸ばしテレビをつける。

ちょうど、深夜アニメを放送している所だった。

ここまでの行動を行うと、桜子は玄関に戻って鍵を閉めて灯りを消した。

彼女は帰宅するとまず最初に、必ずこの流れに沿って行動する。これも、一人暮らしをするようになってから始めたことだ。

部屋に入った時に、中が真っ暗なのが不気味に感じて仕方がないのである。

夜中に帰ってきた時などは、特にそう感じる。

居間に戻ってきた桜子は、安心したようにバックをテーブルの上に置き

上着を脱ぐと大きく伸びをした。

「あーあ……と。今日もお仕事頑張りました」
と、一人で言いながら、近くにあったハンガーを取った。

「さーてと、早くシャワー浴びちゃお」

またも一人で言いながら脱いだ上着を取って、ハンガーへ丁寧に掛けた。

……と、そこで。

桜子はふと、居間の隅にある自分のパソコンの方に目を向けた。
別に意味はない。

本当に、『何の気なしに』だった。

何の気なしにパソコンに目を向けた桜子は、そこで異変に気づいた。

「・・・・・・・・あれ？」

パソコンの、電源ランプが点いている。

「・・・・・・・・？」

不思議に思いながら、パソコンに近づいてみると・・・
やっぱり電源が入っている。

「あれ？何で？」

首を傾げながら、近くにあったマウスを動かすとそれまで真っ暗だったディスプレイが、

見慣れたウィンドウズのグラフィックに切り替わった。

「消し忘れちゃったのかな・・・？」

今をときめくアイドル声優である桜子は、例に漏れず自分のオフィシャルホームページを持っている。

その中で日記を書いて載せているのだが、それはこのパソコンで書いて更新している。

それ以外にもネット利用などで自宅でパソコンを使う回数は非常に多く、

朝の出勤前も起動させる事は度々あるし、時間に追われていて消し忘れてしまった事もあるにはある。

確かに今日の朝も、パソコンは起動させた。しかし・・・

「でも・・・今日は確かに消していったよなあ・・・」

マウスをつろつろと動かしながら、桜子は怪訝な顔で考え込んでいたが、

ふとディスプレイに表示されているマークに気がついた。

「・・・・・・・・ん？メールが来てる」

桜子が使っているメールソフトは、新着メールが来るとアイコンで通知される。

一瞬、その場で開いて読もうかと思ったが、先に入浴を済ませる事にした。

どのみち後でホームページの更新をしなければならないし、その時でも良いだろう。

「……ま、いつか。とりあえずシャワー浴びよ。」

大した内容の物じゃないだろうし。それに、もう体が暑くて気持ち悪いよ。」

仕事のスケジュールは前もってマネージャーより連絡があるし、メールを入れる場合は

携帯電話に入れてもらうようにしてあるので、パソコンの方には入ってこない。

友人からのメールも、やはりメインは携帯でパソコンに来る事はあまりない。

パソコンに来るメールと言えば大体が契約しているプロバイダか、会員登録している

無料のインターネットTVサイトからの広告メールで、いつも適当に流し読んでいる。

このメールもどうせ、その類だろう。

「さっお風呂お風呂。」

桜子は気を取り直すように言うと、バスタオルを抱えて軽やかな足取りで

バスルームの方に消えていった。

第1章 依頼(3)

3.

- 8月14日 18時30分

夏場の日は長い。

東の空はすっかり暗くなっているが、西の空はまだオレンジ色に染まっている。

シルビアの助手席で羽矢人は、車内のデジタル時計に目をやった。

「6時30分過ぎか・・・タカよ。夏は日いい長いなあ」

シートの背もたれに寄りかかりながら、運転席の堯誠に声をかける。
「そうだな」

左手でハンドルを握り、右手で眼鏡のずれを直しながら堯誠は答えた。

このシルビアは、6年ほど前に堯誠が知人から安値で譲って貰った物だ。

1988年から1993年にかけて生産されたS13という型で、かなり年季が入っているものの、堯誠が大事に使っているおかげかまだしっかり走る。

「なんか、変な空やな。周りは真っ暗やのに、遠くの方だけまだ明るい・・・。なんか俺は、

昔っからこの『夏の夕暮れ』が気に入らんのや。このあべこべな感じが」

羽矢人が両手を頭の後ろで組みながら、のんびりとした口調で言った。

「そうか？俺は大好きだぜ？この『夏の夕暮れ』」。

子供の頃からさ、夏場にこういう空になると高いところ行ってじー

つと、バカみたいに眺めてた。

特に高校の頃なんかさ、俺が行ってた高校は夜景がキレイに見える場所にあったから、

夏場は毎日帰りが夜になっちまってたよ」

堯誠は左手で空を指さすと、

「屋上で、こういう空見ながら校内の自販機で買ったフルーツ牛乳飲むのが、その頃の俺の楽しみでな」

と言った。

「うわー……イッタイわあ……」

堯誠の言葉を聞いた羽矢人は、顔をしかめて隠すように右手で顔を覆った。

「んだよ？失礼な。どこがイッタイてんだよ」

堯誠が口を尖らせる。

「だって、見えるもん！お前がその屋上で、なーんか黄昏れながらフルーツ牛乳飲んでるの。」

しかもあれな。そんな時に飲んでるのは『明治ブリック』のやつや。

絶対、そうしとったやろ！

お前！絶対に、カッコいいと思ってやっとなやろ」

羽矢人が半笑いで、呆れたように言った。

「別に、カッコはつけてねえよ！」

堯誠はまた口を尖らせて、反論した。

「いいや、お前はそう言う奴や。」

見ていると、いつもちよつとした仕草にカッコつけるやんか。

缶コーヒー飲む時とか、立って飲む時は必ずポケットに手突っ

込むし、

座ってる飲む時は必ず足組んで飲むやんか」

「違っつて。たまたま、そうなってるだけだつて。

それに足組むのは俺の癖だし、お前だって座ってる時に足組むじやんよ」

「俺はお前、普通に組んでるだけやんか。」

お前、人の目につくような方向に向かって組むやないか！まるでポーズでも取るみたいに。

何やお前、どこのトクガワ先生や！」

「なにを言うんだ！それじゃ、『あの主題歌』にノって踊らなきゃならなくなるだろ！！」

羽矢人の言葉に堯誠がそう返すと羽矢人はけたけたと笑い、『例の主題歌』のメロディーを口ずさみだした。

やがて堯誠もそのメロディーにノリながら、『例の主題歌』を歌い出す。

羽矢人はますます面白がって、手拍子を始めた。

そのまま堯誠は、『例の主題歌』の一番の歌詞を歌いきったが、羽矢人の方はまだ手拍子をやっているので、

「・・・・・・って、いつまでやらせんだよ！！」

と、ベシッと羽矢人に突っ込んだ。

羽矢人はまたも笑い転げると

「お前が自分でやったんやないか！っていうか、ちゃんとフルで歌わなあかんやん！」

堯誠にからかうように言った。

「俺は、一番しか歌えねえつつうの！」

と堯誠は言つと、シルビアのスピードを落とした。前方に見える信号が、赤信号になったためだ。

自分達の前を走っている車が停止すると、堯誠も前方の車から少々車間距離を開けてシルビアを停止させた。

「なあ、タカ。クロスポイントはどこやったっけ？三田やつけ？」

羽矢人は、シートのヘッドレストに頭を載せながら尋ねる。

「ああ。三田国際ビルだつてよ」

堯誠は、バックミラーで後方を確認しながら答えた。

「合流時間は、19時30分やったな」

再び、車内時計を見て羽矢人が言う。

「おう。連絡来た時に、長めに時間を取ってもらったからな。本当は、もっと短い時間で行けるんだけど」

「まあ、何があるか分からんしな。時間に追われると、ロクな事がないからな」

そう言いながら、羽矢人はジーンズのポケットから煙草『チェリー』の包みを取り出した。

「客人。すまねエが車内は禁煙だぜ」

堯誠は横目で羽矢人を見ながら、おどけた口調でとがめた。

「ん？あ、間違えた。こつちや」

手の中にあつたチェリーの包みをポケットにしまつと、もう片方のポケットから

ガムの包みを取り出し、一枚口の中に放り込んだ。

「ハヤト。その煙草、いつ買ったヤツだ？」

「うん？これか？そやなあ・・・確か先週・・・いや、先々週やったかな」

「で、まだ吸い終わらねえの？」

「おう。まだ五・六本残つとる」

「省エネだな。お前さ、だったらいつそのこと煙草吸うの止めた方が良いんじゃないか？」

堯誠がそう言った時、信号が青に変わった。

「ん？青だ」

前方に停止していた車が次々と、発進していくのに続いて堯誠もシルビアを動かした。

「そう言うわけにはいかんて。煙草は俺にとって、エンジン動かす為の『鍵』なんやから」

羽矢人は、もう一度ポケットの中からチェリーの包みを取りだして、堯誠に向かってかざしながら言った。

「へえー。『鍵ねえ』。俺は煙草吸った事ねえから、そう言う気持ちにはわかんねえけど。」

でもお前さあ、オフィスにも煙草吸う人はいるけど、そういう人

もお前の吸い方は変だつて言つてんぞ？」

「しゃーないやろ。俺は『あん時』以外、吸う気が起こらんのや」
羽矢人は喫煙者であるが、ある事をする前にしか煙草を吸いたくないという妙な体質の持ち主だった。

二人を乗せたシルビアは、国会図書館を超えて国会議事堂前を疾走した。

やがて特許庁前の外堀通りとの合流地点に差し掛かると、堯誠は虎の門方面へシルビアを進める。

「今、虎の門か。タカ、国道一号入るん？」

羽矢人の問いに

「ああ。思ったより、道が空いてそうだしな。まあ、混んでいたとしても、ここまで来られれば十分時間までには着くだろ」

と、堯誠はのんびりした口調で答えた。

「今、何時や・・・？6時50分か。全然間に合うな。もし間に合わなくても、遅れるって連絡して時間延ばしてもらえば良いだけやしな」

国道一号線に入ると、車は多かったが混んでいるという程ではなかった。

これなら、スムーズに目的地の三田国際ビルまで行けそうだと。

「やつぱ、都心の夜景ってのはええな。大阪の夜景とはまた違った味がある」

ウインドウから外の景色を眺めながら、羽矢人が楽しそうに言った。
「まったくだな。この都心の夜景ってのは、ホントに良い娯楽だよ。何時間見ても、飽きねえからな」

堯誠も弾んだ声で、同調した。

二人には、夜景を見るのが好きだという共通の嗜好があるのだ。

「ところでタカよ、今回のコンテンツって『オニ』やったっけ？」

「ああ、田村さんはそんな風に言ってたけどな。

ある程度、詳細も説明してくれたけど、携帯の電波が悪いみたいでよく分かんなかった」

「ま、それはこれからタムちゃんに、じっくり聞けばええやろ」

「んだな」

と言いながら、堯誠はシルビアのスピードを少し上げる。

シルビアは国道一号線を順調に走り、ほどなく東京タワーを通り過ぎた。

「お、東京タワーや。やっぱ、ライトアップされるとキレイやな」

「そついや、今日にもう『的』と面会しちゃうらしいぜ」

「え、ホンマに！？ってことは、今日からスタートか」

「そつなるな」

「余裕無いつてことは、こりや相当追い詰められとるな」

「うん。多分な。性質の悪い『オニ』が、くつついてんだと思うぜ。おそらくは」

『オニ』とは、ストーカーを指すPPO共通の隠語である。

「ま、『オニ』は、みんな性質悪いけどな」

「確かに」

東京タワーを超え、赤羽橋の交差点を渡るとすぐ前方に高層ビルが現れた。

お目当ての三田国際ビルだ。

「お、着いたか」

と、言う羽矢人を横目に、堯誠はビル近くの脇道に入るとシルビアを道端に停車させた。

車内のデジタル時計は、『19時15分』と表示されている。

「ちよっと、田村さんに連絡取るわ」

そう言つて、背広のポケットから携帯電話を取り出し、電話を掛けた。

しばしの沈黙のあと、相手が出た。

「あ、田村チーフですか？ 辻内です。」

- お疲れ様です。今、着きました。

ええ、今、ビルの近くに一旦車を停めています。

- ええ。

ここつて、地下駐車場がありますよね？そこは、外来が停めても良いんですか？

あ、大丈夫ですか？じゃあ、そこに今から駐車します。
それで、ええっと、場所は？

- はい。

地下一階のコーヒーショップ。

駐車場内の入口の、すぐ近くなんですか？

- はい。あ、そうですね。わかりました。

では、今から向かいますので。

- はい。失礼します」

堯誠が電話を切ると

「タムちゃん何やって？」

と、羽矢人が尋ねた。

「ビルん中にある、地下一階のコーヒー屋にいるってさ」

堯誠は携帯をポケットにしまいながら答えると

「んじゃ、とりあえず行きますか」

と言って、シルビアを再びスタートさせた。

第1章 依頼（4）

4 .

- 8月13日 10時00分

「ねえ、最近さあ・・・さーちゃんの様子変じゃない？」

石橋千晶にそう話しかけられた時、栗沢なつこはちよつと驚いた。その時、自分もまったく同じ事を考えていたからだ。

なつこはゆつくりと、千晶の方を振り向いた。

「千晶ちゃん、そう思うの？」

「思うよ」

千晶は何を言ってるんだ。と言いたげな顔で言った。

「・・・実はね」

千晶に顔を向けていたなつこは、前に向き直ると

「わたしも、まったく同じ事考えてた」

と、言った。

「やつぱり！？何か、おかしいよね！？ここんどこ」

仲間がいた！という感じで話しかける千晶に

「うん」

と、なつこは頷いた。

東京・渋谷の、某アフレコスタジオ内。

ここで彼女たちは、自分が出演しているアニメ作品のアフレコを行っていた。

4月からスタートしたテレビゲームが原作の作品で、2クール（6ヶ月間）放送する事になっている。

二人ともレギュラーとして、スタート当初からこの作品に参加していた。

なつこは丁度、自分の担当する分が終わったので休憩に入った所だった。

そこにやはり、自分の担当分を録り終えた千晶が休憩に入り、さっ

きの場面になったのである。

ちなみに、『さーちゃん』というのは井川桜子のニックネームだ。彼女はこの作品で、主役を務めている。

また、桜子は千晶やなつこと仲が良く、常日頃から親しく友達付き合いをしていた。

「何かさ」

と言うと、なつこはスタジオに来る時に持参してきた、500?ペットボトルのアップルジュースを一口飲み

「おかしいつていうか、何かにおびえているような感じがするんだよね。わたしは」

と、また千晶の方を向いて言った。

「おびえてるか・・・あたしは、なんか雰囲気を変だなー・・・って思ってたんだけど、

言われてみればそんな感じもするかな・・・」

千晶もそう言いながら、バックからカフェオレの500?ペットボトルを出して一口飲んだ。

「千晶ちゃんは何いつ気がついたの？」

なつこが尋ねると千晶はボトルの蓋を閉めて、目の前のテーブルに置くと

「そうだなあ・・・あたしは・・・最近かなあ？」

でも、気がついたっていうか、そんなはつきりした物じゃ無くて何かこう、

そんな感じがしたっていうか・・・さーちゃんを見ていてさ、いつもと同じように明るいんだけど、

それがわざと明るく振る舞っているような気がしたんだよね」

と、足を組み、むう。と考えるような顔をして言った。

「そっか」

「くりたんは？」

千晶はなつこを、軽く指さして尋ねた。

この『くりたん』というのは、なつこのニックネームである。

彼女と親しい者は、大体このニックネームで彼女を呼ぶ。

「わたしは、一週間位前かな。先週さ、アフレコの帰りに三人でご飯に行っただよね」

「あー・・行っただね」

「あの時にさ、さーちゃん、わたし達が座ってたテーブルの上に、携帯置いてたんだけど」

「うん」

「出なかつたんだよね」

「何に？」

「携帯に」

それに先に気がついたのは、なつこだった。

「あれ？さーちゃん、携帯鳴ってるんじゃない？これ」

彼女達はアフレコ現場近くの、イタリアンレストランで食事をして
いた。

もつともメインになるのは食事よりも専ら談笑の方で、今も桜子と
なつこは最近購入した、

あるゲームソフトの話題で盛り上がっていた。

もう一人の参加者である、千晶は事務所のマネジャーから携帯に連
絡が入り、

今し方電話をする為に外に出て行った。

なつこが話しかけた時、桜子は外で電話をしている千晶の姿に目を
やりながら

アイステイーを飲んでいた。

なつこの呼びかけは、聞こえてないようだ。

「ねえ、さーちゃん？」

なつこがもう一度声をかけると

「え！？なに？どしたの！？」

その声に気がついた桜子が、慌ててこちらを向いた。

「いや、だからそれ。さーちゃんの携帯鳴ってない？」

桜子の近くに置いてある、ピンク色の携帯電話が光っている。それを見た瞬間、何故か桜子は体をびくつと震わせた。

そして、

「また・・・」

と呟いたきり、電話を出ようとしなない。

「？・・・どしたの？」

と、なつこは尋ねたが

「・・・」

桜子は無言まま、固まっている。

「・・・出なくていいの？」

「・・・」

なつこの言葉に、桜子は携帯にゆっくりと手を伸ばした。

「・・・手が震えてる・・・？」

桜子の様子がおかしい。

どこことなく、顔が青ざめているようにも見える。

「どうしたんだろ？」

首を傾げながら、なつこはアイスコーヒーを一口飲んだ。

結局、桜子が出る前に携帯は切れてしまった。

一方の桜子は無言で、携帯を持ったままだ

「さーちゃん？」

と、なつこが声をかけた時、携帯が再び光った。

その瞬間 -。

今度ははっきりと、異変が現れた。

手の中の携帯を見た桜子は、

「嫌アツ！」

と短く叫んで、携帯をテーブルの上に放り投げたのである。

「ちょ、ちよつと、どうしたの！」

突然の事になつこは驚いて、桜子の顔を見た。

「嫌・・・」

桜子は身を縮めるように自分の肩を抱き、小さく呟いてかぶりを振る。

顔がはっきりと青ざめ、その表情は完全に怯えたものになっている。叫び声が聞こえたのか、周囲の客もこちらを伺っている。

「さーちゃん！」

なつこはそんな外野に目もくれず、桜子に駆け寄ると

「ねえ、さーちゃん。どうしたの？大丈夫？」

桜子の肩を掴んで言った。

「！！・・・震えてる・・・」

桜子の肩が、小さく震えている。

「さーちゃん？大丈夫？」

桜子の肩を軽く揺すって、優しく声を掛けた。

その声に気がついたのか、桜子がゆっくり、というより恐る恐るという感じでなつこの顔を見た。

「あ・・・」

「大丈夫？さーちゃん」

また、同じ言葉をかける。

「くりたん・・・あ・・・えつと・・・」

桜子は、不安げに周りをゆっくりと見回す。

周りの客がこちらに注目している事に気づくと、ばつが悪そうな顔

をした。

「さーちゃん。大丈夫？落ち着いた？」

なつこは、もう一度穏やかに声を掛ける。

「え・・・あ・・・うん。あの・・・ご、ごめんね」

ごめんなさい。という顔で謝る桜子に

「ううん。大丈夫。私は別に何でもないから」

と、なつこは軽く首を振って言う。と桜子に尋ねた。

「ねえ、さーちゃん。一体・・・どうしたの？何かあったの？」

「えっと・・・何でもない。うん。大丈夫だから。ごめんね？急に」

なつこの問いに、桜子はうつむき加減で答えた。

だがあんな所を見た上で、『何でもない』と言われても到底納得できない。

「何でもない。って、そんな風に見えるわけ無いじゃん！さーちゃん、絶対に・・・」

なつこが尚も問い質そうとした時・・・

「何でもないの！・・・」

桜子が強い口調で、なつこの言葉を遮るように言った。

周りの客が、またもこちらを注目する。

「さーちゃん・・・」

「あーご・・・ごめんね！ごめんなさい！・・・あの・・・ホントに何でもないの。」

ホントに大丈夫だから・・・ね？」

「あ・・・うん・・・大丈夫なら・・・良いんだけど・・・」

「ごめんね・・・くりたん。でも、ホントに大丈夫だから」

「うん・・・」

なつこにはもうそれ以上、桜子に何が起こっているのかを聞く事は出来なかった。

桜子の態度や言葉から、はっきりとした『拒絶』を感じたからだ。なつこは椅子に座り直すと、またアイスコーヒーを飲んだ。

一方の桜子は、暗い顔で俯いたままだ。

二人の間に、どことなく気まずい雰囲気の流れていく。

「ゴメン、ゴメン。事務所のマネージャー、話が長くつてさあ」
千晶が明るい声で、両手を合わせて謝る素振りをしながら店内に戻ってきたのはその時だった。

「そうだったの!? へえ……」

「うん。そうだったんだよ」

「あゝそういえば店内に戻った時、なんか雰囲気が変だなゝって気はしたっけ」

「けっこうね。周りの人にも、注目されちゃって結構、気まずかったよ」

そう言うと、なつこはバックから携帯を取り出し、ディスプレイに表示されている時間を確認した。

「まあでもさ、そういうのを考えていくと、さーちゃんが変なのは間違いないよね」

「携帯をサイレントにしてる時点で、おかしいとは思ってたんだけどね」

「サイレント?」

「うん。だから、消音でノーバイブにしてたんだよ」

「それじゃあ、電話がかかってきてもわかんないじゃん」

「っていうか、わからないようにする為じゃないかな」

「電話がかかってきた事が?」

「そう」

「うゝん……」

千晶は腕組みをしながら、椅子に寄りかかって唸った。

「……何があったんだろ? 悩みがあるなら、せめて相談ぐらいしてくれても……」

別に大した事が出来る訳じゃないけど、他人に話すだけでも大分違うもんだよ?」

「何か抱えてるのは、間違いないけど・・・

さーちゃんは、あんまり他人に喋ってくれない子なんだよね・・・」
なつこは、口元に手を当てて考え込んだ。

「悩みを中に抱えて、そのままパンクしちゃうタイプだからね・・・
でもあたしは友達として、このまま放ってはおけないよ」

千晶が体を起こして、なつこの顔を見て言った。

「それは、わたしだってそうだよ」

なつこも、千晶の顔を真っ直ぐに見て言う。

「まあ・・・ぶっちゃけた話、何を悩んでいるのかあらかた予想は
つくんだけど・・・」

なつこが続けてそう言ったとき

「おつかれさまです」

という声と共に、誰かが休憩室に入ってきた。

そちらの方に顔を向けた二人は、思わずぎよつとなった。

噂をすればなんとやら。

入ってきたのは、今まさに話題に昇っている桜子本人だったからだ。

「・・・・・・・・・・？どしたの？二人とも。そんな、

毒島大公に満塁ホームランを打たれた時の菅野純みたいな顔して

何も知らない桜子は、当然の如く首を傾げて尋ねる。

桜子の言葉を聞いた千晶は

「・・・・・・・・・・例えば分かりにくいよね」

と、なつこに小声で言った。

「うん。っていうか、なんでストッパー毒島知ってんの？野球見な

いはずなのに・・・」

「・・・まあ、その辺は物語書^{コレ}いてるヤツが、自分の権限で言わし

てんのよ」

「あ・・・そつか。作者は野球マンガ^{アイツ}ばっか読んでもんね」

「ホントにね。ドカベン香川みたいな体してるクセして」

二人は顔を近づけて、ヒソヒソと小声で話す。

「・・・・・・・・・・？」

一方の桜子はそんな二人の姿をみて、ますます怪訝な顔をするばかりだ。

「あの……いいですか？」

桜子は、もう一度声をかけてみた。

「あ、ごめん」

一瞬、ヒソヒソ話に夢中になりかけた二人は、ここで我に返った。

「二人とも、さっきからなに話してんの？」

「うん。ちよつとアヤシイ密談。ねえ？千晶ちゃん」

桜子の問いに、なつこはそう答えると千晶に話を振る。

「……え！？あ、あーあーあ。そうそうそう。うん。ちよつと悪巧みを」

いきなり話を振られた千晶は、舌を縛れさせながら慌てて話を合わせた。

「悪巧みってどんな？」

「うえ！？え？悪巧み？あ、えーつとね」

当然の質問を桜子に返され、千晶はまたもしどろもどろになる。

「それは教えられないのだ」

なつこはすかさず、助け船を出した。

「えーっ……気になるから教えてよ」

「ダメ、です」

なつこはそう言いながら、桜子をそつと観察した。

桜子の様子は、いつもと変わらない。

いつものように、元気で明るい。

だが

・作ってる……………。

いつもと同じ……………に見えるけど……………さーちゃんは、明る

い顔を作ってる。

なつこは自分の読みに、少し自信がある。

それに、自分の親友の異変が分からないほど鈍くは無いつもりだ。

「・・・・・・」

テーブルの上に置いてあったアップルジュースを飲み、一つ息を吐く。

「・・・・・・ねえ。さーちゃん」

「ん？なーに？」

なつこは千晶を一瞥してから、桜子の顔を真っ直ぐに見た。

「ちよつと、聞きたい事があるんだけど。良いかな」

第1章 依頼(5)

5.

- 8月14日 17時35分

「ふいーっ・・・あつついなあ・・・」

たむらいちろうた

田村一郎太はうんざりしたように呟きながら、額の汗をハンカチで拭った。

JR線の田町駅。

その改札口を出た所に、田村の姿はあった。

「こりゃあ・・・今夜も蒸し暑くなりそうだな・・・」

周りをゆつくりと見回しながら、頭の中で呟いた。

時間的に駅の中は、仕事を終えたと思われるサラリーマンやOLの姿が

ちらほらと見えている。

「さて・・・と」

田村は携帯電話を取り出し、時間を確認した。

携帯のディスプレイには、17時35分と表示されている。

「予定の時間は18時だったな・・・」

携帯を操作して、スケジュール帳を表示させ今日の予定を確認する。この後、18時からアラームを上げてきた依頼人と接触しなければならぬ。

田村は今年、36歳になる。

職業はPPOのBPだ。

一応、部署のチーフを務めている。

PPOは、正式名称を『Private Police Organ

anization』という。

直訳すると『民間の警察組織』という意味であり、その名の通りPPOと言うのは

歴とした警察である。

公務員の警察との大きな違いは、このPPOは『民営による警察』という事だ。

つまりPPOは警察『企業』であり、行う事は警察と同じでもそこに利益が発生する。

PPOという存在は、『民警法』が設立された事によって生まれた。民警法は2001年1月に制定され、同年の4月より施行開始となった法律である。

正式名称は、『国民生活安全確保自主防犯法』

警察を民営化する事を可能とした、世界で唯一の法律だ。

このようなトチ狂った法案が可決された理由は、一にも二にも警察の能力低下が

全てに他ならない。

90年代後半から内部での不祥事が続々と発覚するにつれ、警察の能力は

一気に低下した。

かつて世界一優秀と言われていた信用はとうに失われ、80%を記録していた

検挙率は今や20%を切ろうかという勢いだ。

警察官個人に目を向けても、犯罪を犯して『犯罪者』に変わる警察官が続出した。

周りを見回しても、明らかにお役所仕事専門という者ばかりで、か

つてのような

『職人気質で犯罪捜査に執念を燃やす』というタイプの人種は殆どが消え失せるか、

いたとしても厄介事が大嫌いな『事なかれ主義』『臭い物に蓋をする』の上役に

煙たがられ冷や飯を食わされるのが大体だった。

警察の能力低下に反比例するかのように、日本で起こる犯罪は年々巧妙に

猟奇的に、大胆に変わっていき、これまでは欧米諸国などでしか聞いた事が

なかったような異常な犯罪が相次いで起こるようになった。

白昼の人通りが多い場所で人が殺害されるというような、これまでの日本では

あり得なかった事が、さして珍しい事では無くなる程に、この国の治安は

劣化してしまったのである。

この警察の能力低下は、さらにもう一つの問題を引き起こした。

上記にもあった、警察の職務放棄だ。

民間人が犯罪被害に遭い、警察に駆け込んでも警察官に助けてもらえない。

時には頼みである警察にすらひどい扱いを受け、孤立無援となり更に悲惨な目に遭ったり、結局命を落としてしまう犯罪被害者が続出した。

だが治安悪化も警察の能力低下も、具体的な改善はされず
今も悪化の一途を辿っている。

先述したとおり、民警法は警察の民営化を謳った法律である。

しかし、これまで日本で行われてきた電話・鉄道のような民営化と異なっているのは、

組織そのものを国の管理下から外して民営にしてしまうのではなく、本来の警察は

現状のまま国が運営していくという点だろう。

つまり、この法律に則り警察を設立した場合、警視庁・警察庁とは別個の扱いをされる事になる。

そのような点から見ると、この法律は完全な意味での『警察の民営化』を謳っているとは言えない。

しかし、そもそも政府がこの法律を創ろうとした背景には、現在の治安低下の

原因の一つに、近年の人口増加に対して今の官公警察が抱える警察官の人数

では、人数的にどうしても全ての犯罪に対応しきれない。

という理由があり、それを改善する為に世の中の警察官を増加させようと、

毎年新規採用される警察官の人数枠を大幅に増やそうとしたことがあった。

が、警視庁及び警察庁はこの考えに対して、

現在、用意している人数枠からさらに増加させることは出来ない。ごく少数ならば考える事も出来るが、大幅な増加となると状況的に不可能。

という、強い拒否反応を示した。

この件に関しては何度も話し合いがもたれたが、両者が納得するような結果を

創る事が出来なかった。

そこで、政府は新たな方法を模索する事になった。

おりしも、この当時の政府が打ち出していた公約の一つが『治安回復』であり、

政府は自分たちが掲げた公約に対してなんとかしても、例えどんな形であっても

結果を出したいという強い考えがあった。

そして、模索に模索を重ねた上に考え出されたのが、外部の力。

警察単体の力で警察官を増加させられないなら、外部に協力して貰って

警察官を増加させれば良い。

つまり、民間に『警察』を設立出来るようにし、そちらで警察官を増やす。

正確には『警察と同権力を有する存在』を作り、警察と一丸になって治安維持にあたる。

この形をとれば、警察に負担をかけずに『法の番人』を増加させる事ができるし、

今までの人手不足の為に発生する全ての犯罪に対応出来ない。という事態にも

十分対応出来る。

『民間警察』の導入。

これこそが、これ以上の治安低下を防止するに最善の策であるとして、当時の首相はすぐに『民間警察』を作り出す為の法案Ⅱ『民警法』の作成に着手した。

法案を作成すること自体は滞りなく行う事が出来たが、法案を可決する事にはやはり苦勞を強いられた。

新しい『法』というのは、いつの時代でも受け入れられるのが困難だが、この法律の時は今までのそれを上回った。何しろ、『警察』という存在を民営化するのである。

この法案を初めて、表に出した時は周囲から大きな反発が生まれた。先述の通りこの法案は、『官公警察』とは別に『民間で警察組織が創れる』事を定めた法案であって、『警察そのものを民営化します』ということではないのだが、当時の政府はちょうど景氣回復策の目玉として同時に『郵政の民営化』も掲げており、それと一緒に扱われた。

『警察を民間に渡すなんて、国民の命の安全を守る事を放棄するつもりか！』という批判が、野党だけではなく与党からも激しく巻き起こり国会は紛糾した。

議論の過程で『民警法』の本質は理解されたが、それでもやはり

『民間で警察を創る』ということに対して批判は依然収まる気配は無かった。

『民間でも警察を創ってしまったら、本来の警察の存在意義がなくなる』

『民間の企業で、官公警察のような資本・人員・設備をそろえるのは不可能』

『犯罪被害者から金銭を取るなんて、苦しみにつけ込むような真似は人道的にいかなものか』

『国家に縛られない警察組織では、戦前の特高警察のように暴走してしまう恐れがある』

批判は次々とぶつけられたが、政府は一貫して治安悪化に歯止めをかけるには、

これが最善の策であると主張。

最終的には半ば強引な形でこの法案を可決し、『民警法』と『民営警察』PPO』は、世の中に誕生することになった。

田村が在籍しているPPO『サジタリアス・コーポレーション』(Sagittarius Corporation)』

は、その民警法施行後に創設されたPPOの中でも最古参の一つだ。

正確に表すと日本初のPPOは別に存在しており、SC

(サジタリアス・コーポレーションの略称)は日本で2番目に創設された組織に当たる。

実績と年間の『売り上げ』こそ、『PPO業界』の中で第3位という位置付けだが、

その丁寧な『仕事』ぶりは世間から高い評判を得ている。

また、PPOとして有している捜査能力も実際にはSCが図抜けてトップであり、

その捜査能力はいまや警察を凌ぐのではないかと噂されていた。

このPPOに所属して民営警察官として活動する者のことを、
『PPA（正式名称はPrivatePoliceAgent）』
と呼ぶ。

PPAは免許制で、『特殊職業従事者免許（Specialan
OccupationLicense：SOL）』
を取得しなければ、PPAになることはできない。

PPOに所属してなんらかの活動をする者は、その業種がなんであれ全てSOLを取得することを要求される。

これは、所属している者全てが警察官の官公警察と同様だ。
その為、世間的には『企業』という部類に入るが、PPOには一部の業務を除き

アルバイトや契約社員・派遣社員は在籍していない。

働く者全てが、PPAである。

事件捜査には携わらない部署の人間である田村も、SOLを取得・所持している。

階級は、『エキスパート
Expert』だ。

PPAも警察官と同じように、階級が分けられている。

官公の警察は下から

『巡査↓巡査長↓巡査部長↓警部補↓警部↓警視』
と続き、さらにそこから上の役職へと繋がっていく。

PPAの場合は下から

『ビギナー Beginner↓レギュラー Regular↓ハイクラス High - class ↓
エキスパート Expert』

と続き、またその上へと繋がっていく。

『Beginner』は警察で言うところの、警察学校学生。

『Regular』は警察における、巡査・巡査長。

『High - class』は警察における、巡査部長・警部補であり、そして『Expert』が警察での警部にあたる。

『Expert』は実際に事件捜査に当たる実務担当のエージェントの中では、最も階級が高い。

これも官公の警察と同様である。

ただ、警察と異なるのは『警部』がどちらかというと、現場などでの下階級の捜査員に指示を出す立場にいるのに対し、PPOの『Expert Agent (EA)』は積極的に事件捜査を行う。

もちろん、エージェントの中では最高位に当たるので、大人数で捜査に当たる

場合には下階級のエージェントに対する指揮をするが、大体はEA自ら捜査に

当たりながら部下のエージェントに指示を出している事が多い。

田村もE Aであり所属部署のチーフであるが、やはり自分でもB Pの業務をこなしながら

チーフとしての役目も行っていた。

「え・・・つと、クロスポイントは・・・」

田村は駅の入口を出た所で立ち止まると、携帯電話を取り出した。メールボックスの履歴から、一通のメールを表示させる。

「そうそう。三田国際ビルだったな」

田村は携帯を折りたたむと、ポケットにしまいながら辺りを見回した。

さっきと比べて、駅に向かって歩いてくる人が多くなっている。

- 休み返上で仕事。かなあ・・・

自分の前を通り過ぎ、駅に入っていく人を眺めながら、ふと田村は思った。

今の時期は世間的には丁度『盆休み』だが、勿論休み返上で働いている人もいる。

「そっぴゃあ・・・今年もこの時期は休みをとれなかったな・・・」
田村は一人つぶやくと、足下に置いてあるカバンを持つ。

「ま、ウチは仕事柄、暦通りの休み取るのは無理だからな。しょうがないか」

夜に近い夕暮れの空を一度見上げると、よし、と一つ気合いを入れてから歩き出した。

一日の仕事を終え帰宅するために駅へと向かってくる人々と反対に、田村は

田町駅の階段を降りる。

階段を降りてすぐ目の前にある裏通りの道を、慶応大学方面に向かつて進んだ。

歩きながらも一度携帯を取り出し、さっき見た物と同じメールを表示させる。

メールには、今日これから会う『的』の最低限の情報が書き込んであるのだ。

・今回の『的』は29歳の女性・・・内容は典型的な『オニ』・・・
捜査開始日は本日希望。

急だな。それだけ切羽詰まってるってことか。

メールの表示を消すと、携帯電話を閉じてポケットにしまった。

『的』とはSCの専門用語で、事件捜査の依頼者＝犯罪被害者の事を指す。

犯罪被害者は、犯罪もしくは犯罪者の『標的』であることから、『的』という

隠語が使われているのだ。

・実際に聴取してからになるけど、エージェントのスケジュールを調整しないとな・・・。

頭の中で、これからの段取りを思い浮かべながら歩く。

・今、手が空いているエージェントが殆どいないから・・・
今日から事件にかかれるエージェントとなると・・・。

田村の頭の中に、二人の男の顔が浮かぶ。

「・・・良い所があいてるな。あの二人なら、セキュリティも高いし」

ボソリとそう呟くと、もう一度携帯電話を取り出してディスプレイの時間表示を見た。

「おっと、ヤバイ！のんびり歩いてる場合じゃない」

田村は急いで携帯をポケットにしまつと、歩調を小走りにして三田通りを進んでいった。

目的地である三田国際ビルには、何とか18時前に到着した。

三田国際ビルは芝公園料金所の近くにあり、すぐ側に東京タワーも建っている。

そのため、都心の中でも車の往来が多い。

今は夕方という時間帯もあって、いつも以上に車の通行量が多かった。

田村は正面玄関の自動ドアを通つて中に入ると、まっすぐエレベーターホールに向かった。

『』のボタンを押して、エレベーターが来るのを待つ。

このビルは二階より上の階層は全て、ある日本有数の電機メーカーとその関連企業のオフィスが入っており、立場上は別企業が運営する賃貸ビルだが

殆どその電機メーカーの自社ビルと変わらない。

程なくエレベータの到着を知らせる音とともに、ドア付近の上部にあるランプが点滅した。

「お。来たか」

当然、二階より上の階は容易に入る事はできないが、一階及び地下一階には

飲食店やコンビニエンスストアがあり、ビルの関係者でなくとも入る事ができる。

『的』とは、その地下一階にあるコーヒーショップで接触することになっていた。

エレベーターのドアが開くと田村は中に乗り込み、『B1』と表示されたボタンを押した。

目的のコーヒーショップは、エレベーターを降りてすぐ右手にあった。

エレベーターから降りた田村は、また携帯電話を取り出すと時間を確認した。

「よし。まだ時間前だな」

と一息ついてから店の前まで行き、観察するように店内を見回した。店内には多くの利用客が席に座り、思い思いの時間を過ごしている。夏休みシーズンではあるが、ちらほらと背広姿の勤め人らしき姿もあった。

これなら、背広を着た自分が店に入っても浮いてしまう事はないだろう。

「さてと・・・どの席にするかな・・・」

と、店内に入ってもう一度店内を見渡してみると、奥の方に空いている席があった。

四人掛けになっているので、荷物を置く事もできそうだ。

「お、良い所が空いてるじゃないか」

と口に出して言いながら、その席に向かうと取り敢えず椅子の一つに鞆を置いた。

さらに背広の上着を脱ぐと、椅子に置いたカバンの上に覆い被せるようにかけてから、

自分はレジのカウンターに足を運んだ。

カウンターに立っていた女性店員に、オレンジジュースを注文する。代金を支払うと、ジュースが入ったグラスを載せたトレイを持って席に戻った。

田村はコーヒーが苦手で、専らお茶かジュースしか飲まない。

ちなみに最近では、健康を気にしてジュースは極力控えているのだが・・・。

席に着いた田村は、ジュースを味わいながら携帯電話で時間を確認した。

「時間になったな・・・」

ディスプレイには、18時01分と表記されている。

「そろそろ来るだろう」

携帯電話を閉じるとテーブルに置き、入口の方を観察した。

「まっ、的が遅れるのはよくある事だからな・・・」

と呟きながら、ジュースのグラスを手についた時、店内に女性の二人連れが入ってきた。

- あれだな。

その姿を見た瞬間、田村は彼女達が『的』であると直感した。

一方の女性達は、お互いに何かを話しながら店内を見回している。どうやら、誰かを捜しているようだ。

その様子を見ながら、田村はグラスをテーブルに置き、ゆっくりと立ち上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649i/>

二枚の切り札 ~ Two pieces of aces ~

2010年10月22日23時55分発行